

〈資料報告〉

# 埼玉稲荷山古墳出土家形埴輪の復原について

若松 良一

## はじめに

埼玉県行田市にある埼玉古墳群中の稲荷山古墳（墳丘主軸長 120m）から出土した形象埴輪は人物、動物、家、器財、円筒、朝顔などの各種埴輪類が豊富で、関東地方における人物埴輪出現期の埴輪組成と埴輪が再現する葬送儀礼を知る上で第 1 級の資料といえる。その学術報告については昭和 58 年度刊行の『武蔵埼玉稲荷山古墳発掘調査報告書』に主要なものが掲載されている。しかし、これに掲載しきれなかった資料も少なくなかったため、さきたま資料館では資料の再整理を実施し、『調査研究報告』第 16 号から 18 号（平成 15 年 3 月～17 年 3 月刊行）に全点の実測図と観察記録を掲載したところである。

この再整理作業の結果、家形埴輪の中に同一個体の破片が一定量まとまっていて復原に耐えうるものが 2 個体見いだせたので、平成 16 年年度に 1 個体、平成 17 年度に 1 個体を復原し、すでに当館の収蔵品展に展示公開を行っている。また、このうち平成 16 年度復元品は『ナショナル ジオグラフィック』誌 2004 年 5 月号に紹介され、広く国民の耳目を集めた。

これらは稲荷山古墳出土のはじめて全体像を再現できた家形埴輪であり、かつ、全体像のわかるものとしては現在のところ旧武蔵国最古の資料であるという二つの点において高い資料価値を有している。このため、これらは今後、館内に限らずより広い範囲において、展示や研究に活用され、さらには建築史の研究素材として利用されることが望まれ、当館としてもそうした要求に積極的に応えていく必要が生じている。その前提として復原の根拠を明記した正確な資料報告がなされなければならないだろう。

## I 入母屋造家形埴輪 1

### 1 復原の根拠

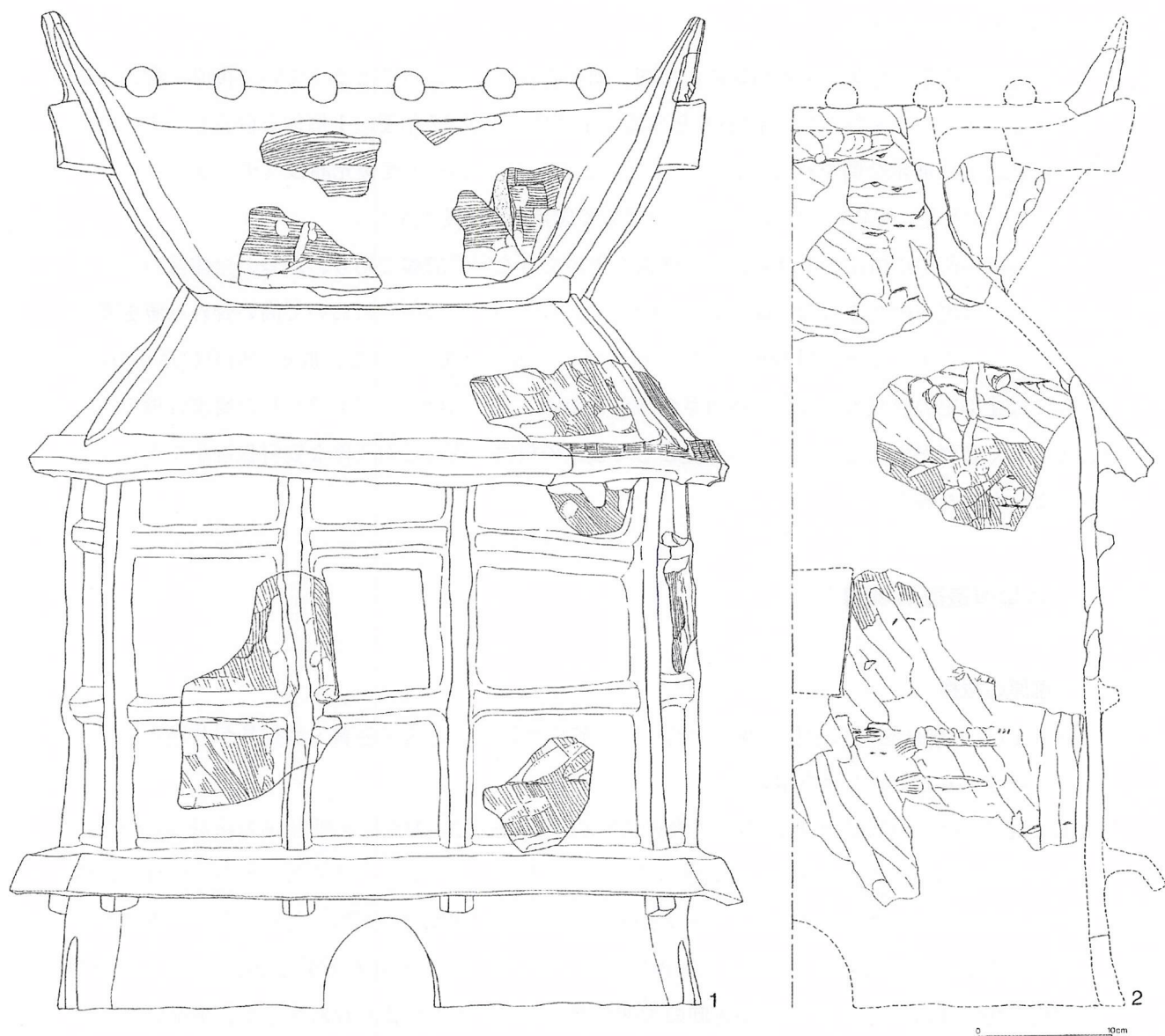
合計 15 片の破片を元に全体の復原を行った。破片は胎土・焼成・色調・調整具が共通し、同一個体と認定できるものだけを用いた。

復原設計の第一段階は、壁体部の構造検討である。破片番号 24（調査研究報告 16 号掲載・以下同じ）には方形窓があり、それに外接して縦横に凸帯が貼り付けられている。このことから、壁体には格子状に凸帯が貼り付けられていることがわかる。この格子が平側では何段、何桁（間）であるかが焦点となるが、24 には窓の下の段と左側の桁を伴っているため、とりあえず窓を中心にした 3 段 3 間構成を想定する。次に 27 は水平方向の湾曲の強さから妻側の壁体と判断するが、下端に器台部の張出が付かないので、第 2 段から 3 段にかけての部分と見られる。また、湾曲のあり方から縦方向

の凸帯が妻側の中心に来るものと思われる。このことから妻側は2段2間構造が想定できる。全体では平側3間妻側2間構造となり、平面形がほぼ3:2の長方形となるので一般的な家形埴輪のあり方とも一致する。

復原設計の第2段階は、器台部の構造である。1点の器台張出部根本部分(26)が現存している。窓からその左側壁体部が残る破片(24)との兼ね合いで、正面平側の右側最下段と想定した。張出の長さや先端の形状は不明だが、バランスを考慮して4cmほど水平に張り出して、先端が斜め下に向かってに屈曲する復原を行った。基底部の破片はないが、26下端部断面の観察から基底部に向かって延びていたことは確実である。前記した張出部は持ち上げる際に手をかけると、全体の重量に耐えかねて折れる可能性が高いので、基底部には手をかけるための削り形があったと考えるのが自然である。二人一組で運搬したと想定されるので、削り形は四個必要だが、各面中央部に一個ずつ配するか、平側に2個ずつ配するかのいずれかであろう。復原では前者を採用してある。

復原設計の第3段階は下屋根の構造である。23は下屋根の隅角部であり、軒を水平にすると、屋根の勾配を求めることができた。



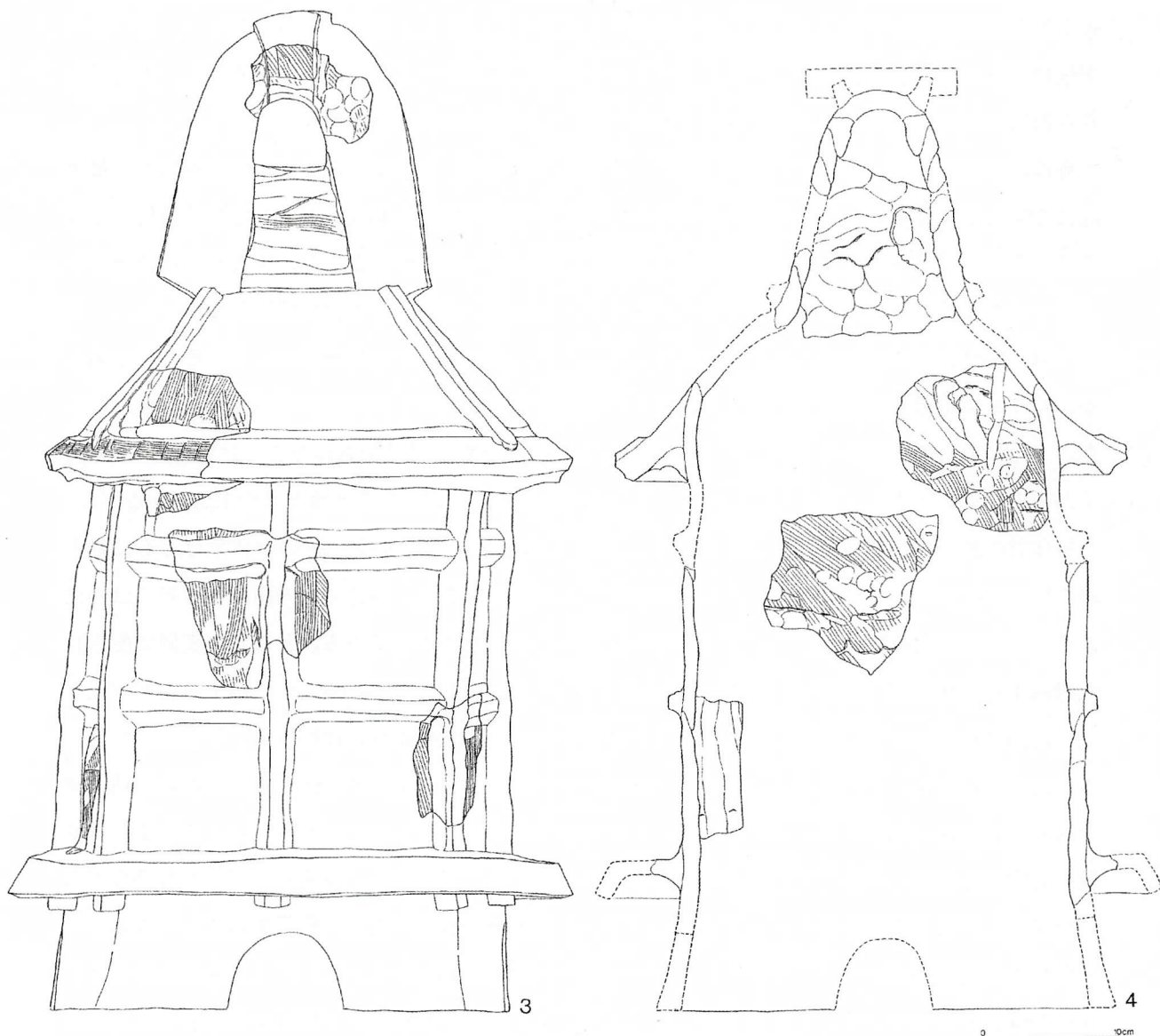
第1図 入母屋造家形埴輪1 (1:正面図 2:正断面図)

復原設計の第4段階は上屋根の構造である。19aは5片が接合した破風部分の立体的なブロックに破風板上端部を組み合わせて復原したものであり、これに19bの大棟部を組み込むことによって上屋根の相当部分を造ることができた。これには上屋根の幅と高さに関する情報が備わっていた。また、大棟の上には堅魚木の剥離痕があるが、そこから右の破風までの間にはかなりの距離があるので、さらに2個の堅魚木が配置されていた可能性が高く、現存部からして3個とはなり得ない。堅魚木の芯々間を算出すると、6.5cmを得ることができた。上屋根の残り3片の嵌め込み復原の状況から、鯉木は全部で6個とするのが妥当であり、このことをもって上屋根の長さが自然に決定された。

なお、下屋根の高さは上屋根に摺り付く位置との関係で、自然に求めることができた。

## 2 復原された家形埴輪の特徴

前記した根拠によって復原された家形埴輪は入母屋造りの家形埴輪で、復原高は74.4cm、最大幅は55.3cm、奥行きは42.3cmある。池からの採集品が多いが、4T・外堀4Tの注記を伴うものもあり、



第2図 入母屋造家形埴輪1 (3:右側面図 4:側断面図)

中堤造り出し上に立てられていたものと推定できる。胎土は粗砂を少量含み、チャート礫、凝灰岩粒、長石、輝石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、器肉は還元がかっている。色調は表面が橙色、器肉は暗灰褐色を呈する。以下に各部ごとの特徴について記す。

#### (1) 壁体部

壁体部はほぼ垂直に立ち上がっており、器台部上面からの高さは40cmある。窓のある側を正面としたとき、最大幅は48.3cm、奥行きは34.5cmある。壁面には格子目状に凸帯が貼り付けられている。水平方向の凸帯は2本あり、垂直方向の凸帯は平側で4本、妻側で3本あるので、格子の区画数は平側で9区画、妻側で6区画となる。この区画はほぼ正方形をなしているが、最上段においては高さが半分ほどとなっている。これは軒の内側に壁の上部が隠れて見えない状態を示している可能性がある。このことからすれば、壁体部は平側で幅3間、高さ3間の、妻側では幅2間、高さ3間の構造であったとすることができ、1間の長さが均一な尺度に基づいた建物をモデルにしている可能性がある。また、凸帯は垂直方向のものが高く、水平方向のものが一段低い。貼付順序は垂直方向のものが先であり、その間をつなぐように水平方向のものを加えている。このような埴輪表現は凸帯が単なる装飾的な要素ではなく、建築構造材を表現していることを示すものであろう。縦の凸帯が柱材を示すのか壁葺き材の押縁を示すのか筆者には速断できないが、少なくとも、縦材に割りか臍穴があって横木を固定した状態を表現している可能性は高いであろう。

窓は正面の中心部、第2段に設けられている。ヘラ切り離しによるもので、左側下隅角から縦方向に8.5cmが残存する。この窓が区画内において左右対称の位置にあり、上下の縁が凸帯付近となることを前提として復原したところ、幅7.5cm、高さ9.4cmの長方形となった。出入り口は背面の中心部か左手妻側に設けられていた可能性があるが、破片が一切ないので復原は行わなかった。

なお、器台部は復原根拠のところの説明したように、張出部の付け根が残存しているだけであるが、バランスを考慮して4cmほど水平に張り出して、先端が斜め下に向かって屈曲する復原を行った。また、基底部の破片はないが、運搬時に手をかけるための削形があったことは疑いないので、手が入る高さを考慮して復原を行ったところ、器台部の高さは張出部の上面までで12.0cmとなった。

壁体部の成形と調整技法について述べる。24の方形窓を持つ壁体部と26の壁体部はともに粘土紐を何本か貼り合わせて板状にしたものを接合する板造りである。前者では内面に、後者では外面にその接合痕が明瞭に残る。これらは平側に配された平坦な壁体部である。ところが妻側に配された彎曲する壁体部27と隅角部となるが直角をなさずに丸みを帯びて曲がる25は粘土紐巻き成形で、内面に接合痕を残している。このような様子から、壁体部の成形には板造りと巻き造りが併用されたことになる。その成形手法は高さ10cm内外の板造りの壁体都合2枚を平側において粘土紐を積み上げて繋ぐ行程を3回ほど繰り返して壁体部を完成させるものであるらしい。このことは埴輪の正面性を重視し、他で省力化を行う製作姿勢を示すものであろう。板造り成形に不習熟な工人の創案した折衷手法とも考えられ、後代には完全な粘土紐巻き成形に移行することになる。

壁体の外面調整はナナメハケ(9本/1.9cm)、内面調整は斜位のユビナデで、隅角部のみユビナデが縦位となっている。上部には先行して施したナナメハケが残る。下位に少し認められるヨコハケは板造りする際に作業台上で平らにならすために行った調整痕とみられる。

外面調整終了後には、まず縦方向の、次に横方向の凸帯を貼り付け、さらに器台張出部を付ける。凸帯は歪んでいて端正とは言い難い。予定線を引かずに目見当で貼り付けたものである。凸帯は雑なヨコナゲが施されているが、張出部の仕上げは丁寧である。

## (2) 屋根部

入母屋造りであり、上屋根と下屋根とに分かれる。下屋根は軒の部分での計測で幅52.9cm、奥行き39.5cmあり、54度の勾配で直線的に立ち上がり、高さは12.5cmある。平面形はほぼ長方形を呈するが、平側が直線的であるに対して、妻側は丸く外彎する。軒の端部には幅2.5cm、高さ0.8cmの平坦な粘土帯を貼り付け、上面には簾状文的なヨコハケを施す。軒先の飾り板を表現したものであろう。下がり棟には幅1.5cm、高さ1.6cmの断面形が方形となる凸帯を貼り付けている。これは屋根葺き材の押縁を表現したものであろう。

上屋根は平側から見ると逆台形を呈し、下幅が27.5cm、上幅が46.5cmある。下端には4面とも凸帯を貼り付けて屋根葺き材の押縁を表現している。屋根の断面形は逆U字形で75度の急勾配を持ち、天辺の大棟は曲面をなしている。妻側には破風板が付くが、その上部のみが現存している。その中心部には幅4cmの長方形板を貼って、左右2材からなる破風板の継ぎ板を表現している。この継ぎ板の直下には半円形に棟木の脱落痕があるので、破風板の外へ突出する断面形が半円形（下面平坦）の棟木を復原して加えた。破風板は平側から見ると外彎して反り返っているが、全体とすると65度の勾配を持っている。

大棟上には4.3cmの間隔をおいて平行する2枚の障泥板と1個所の堅魚木の剥離痕が残っていたので、これらの復原を行った。破風板の裏側には障泥板の剥離痕があり、それに合わせて少し外側に開く状態とした。障泥板の高さは内側では1.0cmであるが、大棟が曲面のため外側では3.0cm前後の見かけ上の高さを有する。堅魚木は復原の根拠のところ述べてように等間隔で6本を復原した。バランスを考えて直径2.2cm、長さ12.0cmの円柱とした。また、障泥板に半円形の剥りを付け、堅魚木が嵌め込まれている状態を示した。

屋根部の成形と調整技法について述べる。まず、壁体部と屋根部との接合方法であるが、壁体に連続して屋根を粘土紐巻き上げ成形で造り上げている。これに対して、軒は壁体の外側に粘土を貼り付けて造り出したもので、粘土塊を挟み込んで補強する。外見上はこの付け足しの軒と屋根とがいささかの齟齬もなく連続したものに見えており、技術的に容易ではない処理を上手にこなしている。しかし、軒の出はわずかに5.5cmであり、より出の強い近畿地方の多くの例にくらべると非写実的な、手抜き表現といえるであろう。

下屋根には連続して上屋根母屋部分を粘土紐巻き上げで成形し、妻側の穴から手を差し入れて、内側の隅角部を粘土で補強し、最後に穴を粘土板で閉塞する。次に、端部をヘラ切り整形した三角形の板2枚ずつをそれぞれの妻側に接合し、天井部を掛け渡して切妻部とし、端面に破風板を取り付ける。その上端部は粘土をユビオサエで伸ばして整形したもので、縁に向かって薄くなっている。なお、下屋根との境界部に凸帯の剥離痕があり、接着効果を増すためにヘラ先刺突が加えられている。

下屋根の外面調整はナナメハケであるが、傾斜方向の異なるものを交互に施した部分がある。内

面調整は斜位の強いユビナデである。上屋根の外面調整はヨコハケ（13本／2.2cm）、内面調整は斜位の強いユビナデである。大棟付近では、内面には天井部閉塞用の粘土が内側からユビオサエで貼り付けられている。内面調整は雑なユビナデである。切妻部はハケ調整後にナデを加える。

## II 入母屋造家形埴輪 2

### 1 復原の根拠

合計 12 片の破片を元に上屋根の復原を行った。破片は胎土・焼成・色調・調整具が共通し、同一個体と認定できるものだけを用いた。

復原設計の第 1 段階は破風部分の復原であった。破片番号 1 は破風部の過半を占める大型のブロックなので、中軸線を設けて左右対称形に復原したところ、破風が完全に復原でき、さらに上屋根の勾配を出すことと破風の傾斜角を求めることが容易であった。

復原設計の第 2 段階は大棟の長さを求めることであった。破片番号 3 は鱗飾りの付く大棟であるが、内面の観察から、その一方の端部が母屋を最後に閉塞した部分と見られた。また 2 にはその母屋から剥離した痕があり、母屋に取り付いて切り妻部を形成していたと判断され、さらに 4 は妻側に壁の付く母屋部であった。これらは 1 の破風部分には接合せず、反対側の妻付近に配置されることがわかった。このため、鱗飾りの切り込みを大棟の中心に設定し、三者を適切な位置に置くことによって、大棟の長さを割り出すことが可能となった。

### 2 復原された家形埴輪の特徴

入母屋造りの家の上屋根部分で、最大長は破風上端部にあって 70.0cm、最大幅は破風板の下端にあって 30.0cm、復原高は下屋根の一部を含めて 26.5cmある。6T2 区南拵・5T1 区表土・2 区内堀 2T・3T 内堀・14T 表土・埴頂部昭和 58 年 5 月表面採取の注記があり、後円部埴頂に立てられていたもので、一部が埴裾に転落したものであることがわかる。胎土には粗砂を少量含み、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒、黒色軟質粒、輝石が観察される。焼成は良好で、主に橙褐色、部分によっては赤褐色、器肉はくすんだ灰褐色を呈する。

屋根の断面形は逆 V 字形で大棟の部分には丸みがある。屋根の勾配は 72 度で下端部の最大幅は 22.3cmある。下端部には 4 面とも凸帯が水平に貼り付けられており、屋根葺き材の押縁を表現したものであろう。凸帯は円筒埴輪に伴うものと共通しており、断面形は上面と両側面の内湾する台形である。下屋根の上端部がわずかに残り、その勾配は約 60 度であるが、正確を期しがたい。破風板は幅が 7.3cmあり、全体では馬蹄形をなし、丸みが強い。切妻部の張り出す角度は 54 度である。棟木の表現は行われていない。

大棟上には鱗飾りが付く。鱗飾り板は厚さ 1.2cm の平板なもので、ヘラ切りによって、斜辺が造られている。現存高 5.4cmを測るが、まもなく水平な上縁部に移行するものと推測される。この鱗飾りは近畿地方に例のある大棟の頂上に 1 列が付くものと異なって、障泥板のように 2 列が付く。中心部に斜めの切り込みがあって、左右対称形と推定されるが、現存部に線刻や彩色の文様は認められない。鱗飾りの長さからみて、4 枚のそれぞれ中間部にもう一箇所逆三角形の切り込みがあっ

た可能性がある。

成形と調整技法について述べる。下屋根から連続的に母屋を成形し、その外側に切妻部を接合している。母屋の内側は内面調整が雑で、天井部は補強用粘土を貼り足して、ユビオサエで閉塞を行っている。このことから、母屋部では最後に閉塞する部分以外は、手を差込んで内面の調整を行っていたことがわかる。3では粘土紐が十分綴じ合わされていないので、最後に閉塞を行った部分とみられる。下屋根と上屋根の境界部は内面を幅の広い粘土帯で補強し、外面は妻側と平側の両方に凸帯を水平に貼りつける。切妻端部の側面には幅7.3cmの粘土板を貼りつけて、破風板を表現する。

下屋根と母屋は非板造りであり、平面形で隅丸方形に粘土紐を積み上げて成形している。しかし、4では端面をヘラ切りした粘土板を小口側に接合し、隅角の内側に補強用の粘土を貼り足している。母屋の妻側壁には一部に板造りの技法が組み合わされていたらしい。

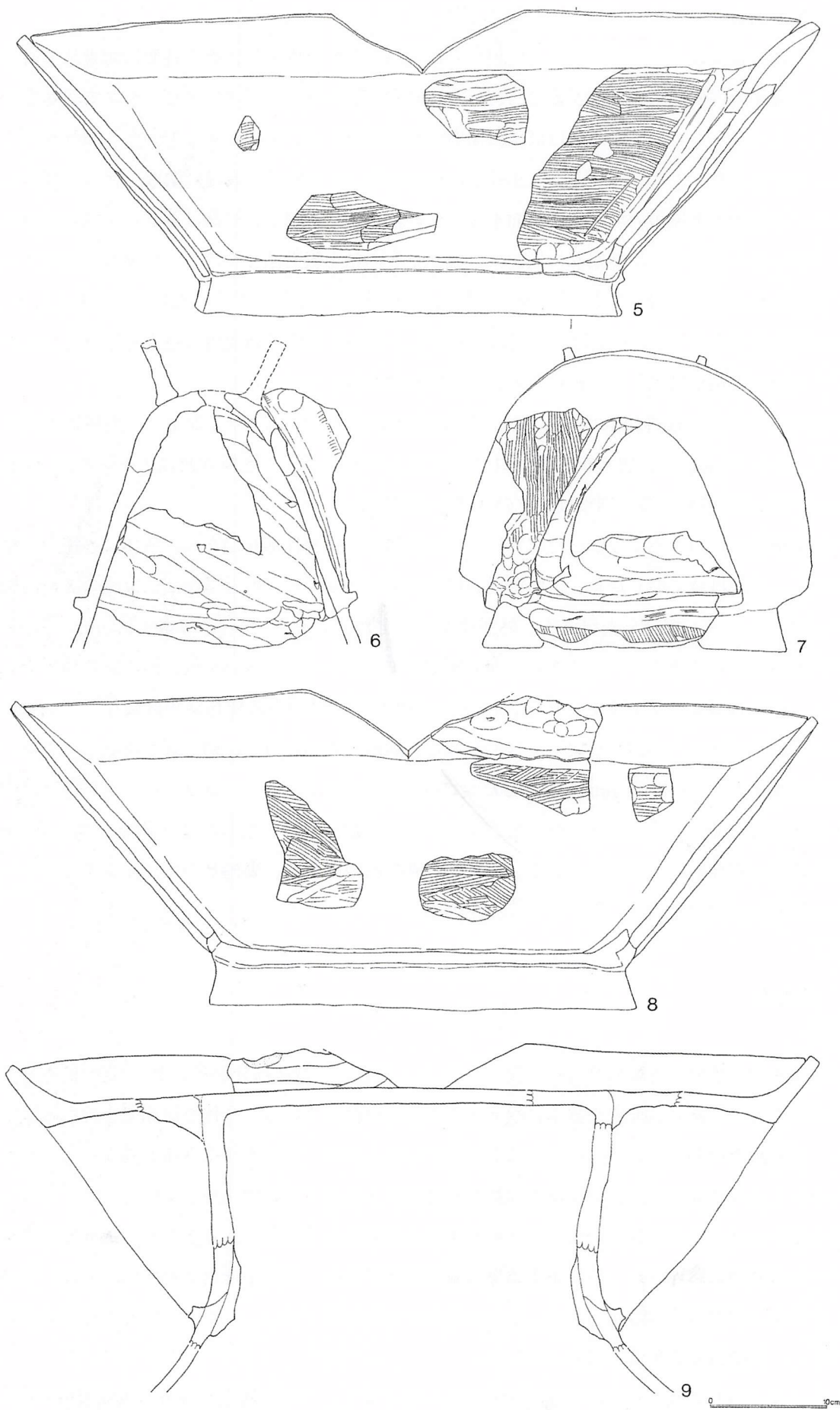
調整は内面及び妻部外面はユビナデ、上屋根外面はヨコハケ（7本/1.2cm）、破風板外面はタテハケ（7本/1.4cm）、破風板内面はヨコハケ後、ナデ消し、下屋根外面はナナメハケ（8本/1.3cm）である。鱗飾り板の調整は横位のユビナデである。

今回の復原には組み込まなかった破片に、同一個体の下屋根軒部6があり、壁体に連続して屋根を成形し、軒部は後で貼り足し、下側に補強用粘土を加えている。外面下端部には幅の広い凸帯を水平に貼りつけて、押縁を表現する。外面調整は左上がりのナナメハケ（7本/1.3cm）で、下端部のみが右上がりのナナメハケである。内面調整は左上がりのナナメハケ後、同方向のユビナデを重ねる。軒部はヨコナデである。また、7は同一個体の可能性がある壁体隅角部破片で。粘土紐の巻き上げ成形であり、内面に5段の接合痕が残る。隅角は丸みを帯び、粘土紐も連続している。外面調整のタテハケ（6本/1.1cm）を施した後に隅角には垂直に高さ2.1cmの凸帯を貼り付け、次に水平方向の凸帯（高さ1.5cm）を平側と妻側の両面に貼り付け、最後にナデ調整を加える。8も類似性の高い壁体隅角部の破片である。隅角に垂直の高い凸帯を、妻側と平側に直交するやや低い凸帯を貼り付けている。

### Ⅲ まとめ

稲荷山古墳出土の家形埴輪2個体を復原した。ともに石膏の後補部分が多いが、一定の根拠をもって復原したものであり、研究や展示に耐えうるものと確信している。全体を復原できたものは中堤上に、上屋根だけのものは後円部頂上に置かれていたもので、その系統や意味も異なっているかもしれない。ともに入母屋造りで下屋根の軒や壁体部にも共通する特徴を持っている。たとえば、壁体部の格子目状の凸帯表現は稲荷山古墳を関東地方における嚆矢とし、さきたま古墳群では6世紀前半の瓦塚古墳に踏襲され、鴻巣市生田塚埴輪窯跡群でも同一表現が採用されているので、この地方の共通する建築様式を忠実に表現したものであった可能性が高い。しかし、大きさは後者が格段に大きく、屋根飾りの形式も異なっていた。

さきたまの首長の残した当時の家の情報をより深く知り、今後の研究や将来の復原家屋の施工・活用の夢につなげたい。多くの家形埴輪研究者や建築史家のご教示を乞うものである。



第3图 入母屋造家形埴輪 (5:正面图 6:側断面图 7:右側面图 8:背面图 9:正断面图)





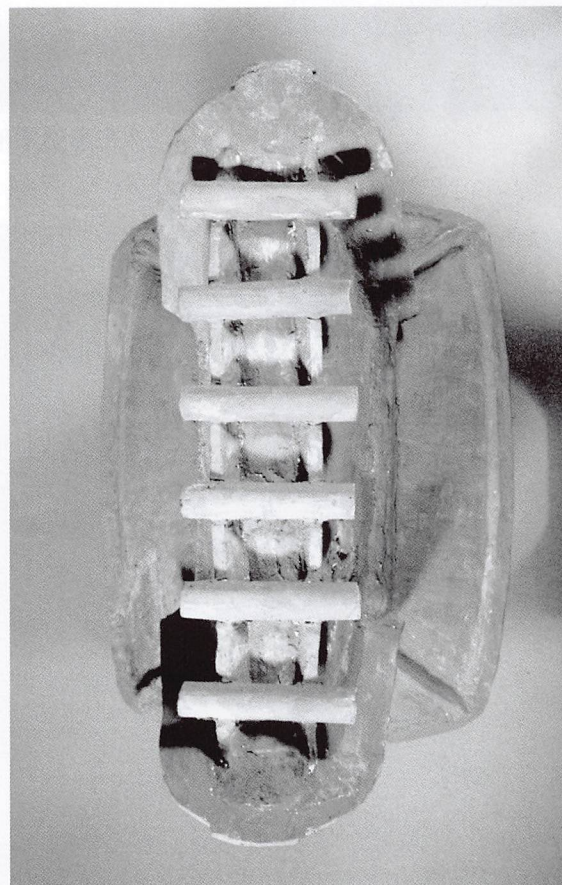
入母屋造家形埴輪 1 (正面)



入母屋造家形埴輪 1 (右側面)



入母屋造家形埴輪 1 (背面)



入母屋造家形埴輪 1 (上面)



入母屋造家形埴輪 2 (正面)



入母屋造家形埴輪 2 (背面)



入母屋造家形埴輪 2 (右側面)



入母屋造家形埴輪 2 (上面)